

レッジョ・エミリア・アプローチを取り入れた 日本の保育実践の研究

— 鳥取県・赤碕こども園の実践検討 —

Research on the Japanese Early Childhood Education and Care Practice

Adopted the Reggio Emilia Approach

*— Focusing on the Practice in Akasaki Centers for Early Childhood Education and Care
in Tottori —*

高井 芳江 *Yoshie Takai*

(人間発達学部)

はじめに

2018年度から「幼稚園教育要領」「保育所保育指針」及び「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」が改訂(改定)され、施行される。この改定保育所保育指針の「人間関係・ねらい」では、「身近な人と親しみ、関りを深め、工夫したり、協力したりして一緒に活動する楽しさを味わい、愛情や信頼感をもつ」とある。換言すれば、子どもが互いに関わりを深め、協同して遊ぶことができるようになるため、自ら行動する力を育てるとともに、他の子どもと試行錯誤しながら活動を展開する楽しさや共通の目的が実現する喜びを味わうことができるようにする、と示されている。これは一例だが、改定される「幼稚園教育要領」「保育所保育指針」及び「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」により、いま、保育界では「保育の質の保障」なかでも「保育内容の質の向上」が、理論的にも、実践的にも究明が求められている。

以上の動向を踏まえ、本稿では①理論的にも実践的にも世界的に注目されているイタリア、レッジョ・エミリア市の保育理論と実践に注目し、さらに②この理論と実践に学び日本のこども園で実践を展開している、鳥取県・赤碕こども園の保育実践を取りあげ、検討を行う。

レッジョ・エミリア市の保育は、1991年アメリカの『ニューズ・ウィーク』誌に「最も革新的な幼児教育」として紹介された。その後、世界からレッジョ・エミリア市の子どもたちの表現力や思考力が注目され、レッジョ・エミリア・アプローチの実践が広がっていく。

2016年2月、筆者はレッジョ・エミリア市の保育所・幼児学校を視察し、教育理念とレッジョ・エミリア・アプローチの特徴を確認した。この経験から、日本においてレッジョ・エミリア市の乳幼児教育の実践、プロジェクト活動、ポートフォリオ作成など導入できるのか検討をしたいと考えた。

以上のことから、2017年8月、レッジョ・エミリア・アプローチの実践で注目されて

いる赤碕こども園（鳥取県）の視察を行った。日本での決して十分とは言えない保育条件の中で、保育者はどのように学び、プロジェクト活動を実践に活かしているかを視察し、考察を行うことができた。「保育内容の質の向上」という観点から、レッジョ・エミリア・アプローチを取り入れている赤碕こども園の保育の実践を検討する。

I. レッジョ・エミリア市の保育実践

1. レッジョ・エミリア市の実践の特徴

レッジョ・エミリア・アプローチの意義と特徴について、木下は「レッジョの実践そのものは、第二次世界大戦末期、北イタリアからのナチス・ドイツ撤退の直後に始まった親たちの共同保育運動に端を発して」¹⁾いと述べているが、その歴史の深さが伺える。

また、レッジョ・エミリア市を「実践を支える思想と仕組みの全体——子どもの権利に基本をおく教育理念、保育者の民主的な協力関係、保育実践への親参加のレベルの高さ、0歳からの一元的な保育行政・制度など——を含めた意味で保育先進地となっている」²⁾と位置づけている。

さらに、レッジョ実践から学び取ることができることとして、中坪は「幼児は無限の可能性と大人と同等の能力を有しているという幼児観に基づいてもいる。援助者としての教師とは、指導者としての教師と比して、その働きかけの質が異なること、個々の子どもの声に耳を傾けるために積極的に働きかけること」³⁾を挙げている。この言葉は、指導者として振る舞う多くの日本の保育者との違いを示唆している。

子どものとらえ方・子ども観は、実践に取り組む際に重要であるが、その上で山本、原は「実践する場合に大事なこととして、子どもをよく観察し、ドキュメンテーションの過程の中で、こどもを理解し、これから起こりうる行動を想像・予測する。子どもの活動に応じて資源を提供し、子どもの意図と保育者の対話によって、もっと深く探究できるようにする」⁴⁾とまとめている。

2. レッジョ・エミリア市の歴史と保育思想

関係する著書、論文の内容をたしかめるために、筆者は、2016年2月にレッジョ・エミリア市の乳児保育・教育の視察を行った。街並みはビデオその他の記録で見たような古い城壁に囲まれ、16～17世紀の建造物、広場の石畳など中世を思い出させる。この街の郊外では、農・畜産業が盛んで、パルメジャーノ・レッジャーノ・チーズの産地として有名である。乳牛の管理も厳しく、作られたチーズは規格にあった物が刻印され、販売が許可される。熟成チーズ工場の前に積まれた山のようなチーズは迫力ある光景であった。また、ファッションブランドのマックス・マラーは、利益の一部を乳幼児教育に寄付するなどこの地で社会貢献をしている。世界の100カ国で店舗を持ち、レッジョ・エミリア市ではマックス・マラーの店舗が中世の街に溶け込んでいた。

レッジョ・エミリア市は、北イタリア、フィレンツェの北西、エミリア・ロマーニャ州にある面積231.56km²、人口17万2090人（2014年）の小都市である。

第二次世界大戦での敗戦後、住民によって幼児学校（3歳～5歳児）と保育所（0歳～3歳未満児）が建設された。その経過は、以下に示す通りである（表1）。

表1 レッジョ・エミリア市の乳幼児保育・教育の推移

1945年頃	第二次世界大戦後、父母や教師がドイツ軍撤退後、焼け跡の瓦礫の中からレンガを拾い集め幼児学校を建設していった。イタリア国内ファシストの権力やナチス・ドイツの侵略に対して最後まで反対したレジスタンス運動が活発だった。地域住民による保育所8か所の自主運営を始める。
1963年頃	60年代、女性たちによる乳児保育への要求が高まる。3歳から6歳のための幼児学校を数か所設立し、幼児学校のためのネットワークを始めた。
1971年頃	3か月児から3歳児のための乳児保育所を開設し始めた。
1979年頃	市立幼児学校が20か所、市立乳児保育所は11か所となる。ローリス・マラグッツィの教育的方向性を示していった。
2013年頃	幼児学校（3～5歳児）21か所、乳児保育所（0～3歳）23か所。移民、難民も受け入れ、人口が増え続け、多文化化が進んでいる。

3. レッジョ・エミリア市の保育実践評価の経緯

「レッジョ・エミリア・アプローチ」と呼ばれる乳幼児教育が世界から注目を浴びたのは、教育家ローリス・マラグッツィ（1920年～1994年）の指導があったからである。

創始者のひとりであるR. マラグッツィはデューイ、ヴィゴツキー、ピアジェなどの理論を発展させ、保育の基礎を作った。レッジョ・エミリア市の教育理念は「100の言葉」に示されている。

表2 レッジョ・エミリア市の保育・教育実践と他国の実践の取り組み

1980年初頭	欧米の保育研究者の間で、レッジョ・エミリア市の実践の質の高さが注目を浴びる。スウェーデンで世界最初のレッジョ・エミリアの展示会が開催される。
1980年後半	ヨーロッパ統合を背景に進められたECレベルの保育政策策定過程において北欧の保育実践と並び、エミリア・ロマーニャ州の保育行政や施設や実践がヨーロッパにおける最先端のモデルを提供するものとして評価される。
1991年12月	アメリカ『ニューズウィーク』誌で紹介される「世界で最も優れた10の学校」。アメリカにおけるレッジョ学習熱が高まった。
2001年4月	ワタリウム美術館（東京）で2か月間、レッジョ・エミリア市の実践「子どもたちの100の言葉」が紹介される。同時期、世界各国でレッジョ・エミリア市の実践記録が展示される（1980年～2007年）。
2011年4月	ワタリウム美術館（東京）で3か月間、「驚くべき学びの世界」が展示される。

4. 教育理念：ローリス・マラグッツィの「100の言葉」

小さな子どもは言葉でコミュニケーションをとることは難しい場合があるが、子どもたちが自分のアイデアを伝えることが出来るようになるために多くの方法（「ことば」）を

紹介している。それは、人間が考えや感情を表現するために、発見した方法である。

例：描画・造形・粘土細工・針金細工・仮装・演劇・歌・踊り・身体表現などである。

レッジョ・エミリア市の教育理念

「冗談じゃない。百のものはここにある。」⁵⁾— R. マラグッツィの詩—

子どもは	手を使わないで考えなさい。
百のもので作られている。	頭を使わないで行動しなさい。
子どもは	話さないで聴きなさい。
百の言葉を	楽しまないで理解しなさい。
百の手を	愛したり驚いたりするのは
百の考えを	イースターとクリスマスのときだけ
遊んだり話したりする	にしなさい。
百の考え方を	学校の文化は子どもに教える。
愛することの驚きを	すでにあるものとして世界を発見しな
いつも百通りに聴き分ける百のものを	さい。
歌ったり理解する	そうして百の世界のうち
百の楽しみを	九十九を奪っている。
発見する	学校の文化は子どもに教える。
百の世界を	仕事と遊び
発明する	現実とファンタジー
百の世界を	科学と想像
夢見る	空と大地
百の世界を持っている。	理性と夢は
子どもは	ともにあることが
百の言葉を持っている。	できないんだよと。
(その百倍もその百倍もそのまた百倍も)	
けれども、その九十九は奪われている。	こうして学校の文化は
学校や文化は	百のものはないと子どもに教える。
頭と身体を分けている。	子どもは言う。
そして、子どもにこう教える。	冗談じゃない。百のものはここにある。

佐藤 学 訳

5. レッジョ・エミリア市の実践

筆者は、ローリス・マラグッツィ国際センター（写真1）を視察した。同センターはR. マラグッツィ氏が亡くなった1994年、彼の遺志を継承し、世界とのネットワークを繋いでいく目的でレッジョ・チルドレン（乳幼児教育展開の中心機関）の本拠地として創設された。チーズ工場だった建物を市が修復し、作られた複合施設であり2006年に開設された。

センター内では幼児学校に加え、小学校も開校している。センターの研修会場でレッジョ・エミリア・アプローチの歴史、保護者・市民と共に作り上げる協同性など聞くことが出来た。当センターに向かう駅の地下道の壁面はドキュメンテーションの展示場であった。「自転車プロジェクト」の絵やコラージュが描かれ（写真2）、街の人々は子どもたちの表現を尊重していることに気付かされた。



写真1 R・マラグッツィ国際センター



写真2 自転車プロジェクト



(1) 市立グアスタッタ (Guastalla) 乳児保育所 (0歳～2歳児) (写真3)

レッジョ・エミリア市近郊の Bassa Reggiana (バッサ・レッジャーナ) と呼ばれる 8つの自治体 (ボレット・プレシエッロ・ガアルチエリ・グアスタッタなど) が運営する。乳児保育所10か所、幼児学校5か園あるが、その一つである。

2012年5月大きな地震が起こり二つの幼児施設が倒壊、2015年9月ボローニャ市の建築家マリオ・クチネッラの設計により再建した。園舎は木材 (イタリアの高山のモミの木) とガラスで作られ、流線型でクジラの形をしている。それはお腹の中の柔らかい様子を表し、ピノキオがクジラのお腹から出て人間の子どもになった童話からヒントを得ている。隣の保育室との境の壁は特殊なガラスを使用し、地震対策も考慮した建築である。



写真3 ガラスの壁の保育室



写真4 三角鏡



写真5 ライトテーブル

市立グアスタッタ乳児保育所の概要

5クラス	園児全体の乳幼児	68名	教師全員	11名
0歳児クラス (5か月～1歳)		12名	教師	3名
1歳児クラス (1時まで保育)		12名	〃	2名
〃 (16時まで保育)		14名	〃	2名
2歳児クラス		15名	〃	2名
〃		15名	〃	2名
職員	教師11名、その他 用務・給食職員配置、園長不在 (ペダゴジスタが園の運営や実践に対する助言と責任を負う。)			
	ペダゴジスタ (教育コーディネーターの事であり、他園と兼務)			

教育理念は、①子どもが主役であり、教師はフォローすべき役割がある、②大人 (親・教師) は子どもを支援し、子どもの要求に耳を傾ける、③家族の参加によって成り立って

いく。そして、レッジョ・エミリア・アプローチを取り入れて、地域に合わせて解釈し教育を進めていく、としている。

環境設定として、空間が重要であり、子どものニーズに合わせて、教師が変えていく。三角鏡(写真4)、ライトテーブル(写真5)が設置されていた。柔軟な対応、自然の素材を使い、自分自身で表現していく、のである。2歳児の造形(写真6・7)。

食事は、パスタ中心の食事である。調理担当者が考慮していることは、①BIO(ビオ)遺伝子組み換え種子や化学肥料、農薬の使用は禁止、合成着色料や香料、化学調味料、保存料等を使用せずに加工したものを使用している、②天然の塩を使っている、③アレルギーの子どもへの配慮、④肥満を防ぐこと、であった。



写真6 2歳児



写真7 完成品 自然素材を使って



写真8 トンデレイ幼児学校

(2) トンデレイ (Tondelli) 幼児学校 (3歳～5歳児) (写真8)

レッジョ・エミリア市内の静かな農村地帯にあり、元小学校の校舎を利用している。保育室、廊下、階段には子どもたちの作品が多数展示してあった。どの幼児学校にもあるように、三角鏡やライトテーブルがあり、アトリエには様々な素材が置かれていた。仮装が出来る衣装もハンガーに多数掛かっていた。

トンデレイ幼児学校の概要

園児	78名
職員	教師6名、アトリエリスタ(美術専門家)1名、調理員1名、フルタイムヘルパー2名、パートタイムヘルパー3名
学期	9月1日から6月31日まで(希望者のみサマースクールあり)
教育時間	31時間/週

(3) レッジョ・エミリア・アプローチを支える

—創造的リサイクルセンター・レミダ(REMIDA)(写真9)—

創造的リサイクルセンター・レミダ(REMIDA)は1996年にレッジョ・エミリア市と多目的企業ENIA(ガス・電気)による共同プロジェクトとして作られた。子どもたちの表現活動に使われる素材を市と協力して企業から集め、保管し(写真10)、乳幼児施設に無料で提供している。市内200社と提携し、紙・金属・プラスチック・布・機材など未使用の素材が集められている。

一年に一回、子どもから老人までの市民が協同して主役となって参加する文化的プロジェクト「レミダ・デー」が開かれる。イタリア、デンマーク、オーストラリア、ノルウェー、スウェーデン、ドイツの国々の間でセンターが築かれ、レミダネットワークが出来ている。その目的は①持続可能な文化、創造性の文化、過剰でない文化を普及すること、②アイデアと経験の交流をする、③他のセンターの設立を支援する、④文化的な主導性や各種セミナー、会議や協議会などを計画し組織すること、である。なお、日本には残念ながらレミダは設立されていない。

筆者はREMIDAのワークショップに参加した。5～6人のグループに分かれてテーマを決め、素材を使って新しいものを制作した。その過程では、紙、布、糸、プラスチック、段ボール、チェーン、ボタン、木片など様々な素材が美しく並べられ、参加者は、何を作ろうかと期待が生まれた。乳幼児にとっても素材の種類と量がふんだんにあることは創造への意欲が高められることを改めて推察できた。



写真9 レミダ玄関



写真10 素材倉庫

次に、レジヨ・エミリア・アプローチに学んで保育実践に活かしている、赤碕こども園の保育を検討したい。

Ⅱ. 赤碕こども園視察—幼保連携型認定こども園—

1. 赤碕こども園の概要・沿革

2017年8月、鳥取県東伯郡琴浦町にある赤碕こども園（写真11）を訪問した。緑の木々に囲まれた園舎、園庭には芝生のグラウンドと池があり池の横には稲が青々と揺れていた（写真12）。野菜作りも行っていて、トマト・トウモロコシなどを栽培していた。

赤碕こども園は1936年（昭和11年）常設保育所「和光託児園」として創立し、1940年（昭和15年）に赤碕保育園と改称した。1999年（平成11年）第三代目園長、福田泰雅園長が就任し（現理事長）、数々の実績を重ね、2012年（平成24年）レジヨ・エミリア市での研修会で保育実践を報告する。2016年（平成28年）幼保連携型赤碕こども園として開始し、片桐隆嗣園長が就任する。

赤碕こども園概要

2017・4・1現在

0歳おひさま	1歳ことり1	1歳ことり2	2歳はな1	2歳はな2	3歳未満児
3	11	6	13	10	43名
3歳つき	4歳にじ	5歳ほし			3歳以上児
20	18	23			2号認定 61
1	3	1			1号認定 5
合計 21	21	24			66名

赤碕こども園	園長1名、副園長1名、事務職員1名、主幹保育教諭1名 保育教諭（常勤正職員13、常勤臨時職員6、非常勤保育士4） 調理師（栄養士1、常勤調理師1、臨時調理師3） 短期間用務（送迎バス運転手3） 嘱託医師（内科外科医1、歯科医1、眼科医1）、薬剤師1
放課後児童クラブ	定員概ね40名 指導員常時4名
子育て支援センター 「アトリエ ラボ」	概ね10組程度 未就園児と保護者



写真11 園の正面



写真12 稲田



写真13 誕生日準備

2. 各クラスのプロジェクト活動

(1) 年長（ほし組）—「おにぎり」から米作りプロジェクトへ—

誕生日会の準備は司会・壁面を製作・プレゼント作りなどの担当に分かれて取り組んでいる。司会担当の4人は椅子に座って当日の進行、司会者の言葉を鉛筆で紙に書いている。遊戯室では、大きな紙に10人の子どもたちが誕生日会の壁面を製作している（写真13）。毎月製作した作品は誕生日会で発表しているという。子どもたちの作品は、平面のものや立体的に貼ったりしている。8名のプレゼント製作係は、ペンダントを作っていた。どのグループも保育者に指示されなくても、友達と相談しながら、取り組みを進めていた。

「おにぎり」の絵本を読んだことから、「米作りプロジェクト」の活動に取り組んでいる（写真14）。田んぼを見に出かけ、みんなで園庭の一角に田んぼを作った（写真15）。一連の楽しく取り組んだ様子が、壁面にポートフォリオとして貼られている（写真16）。

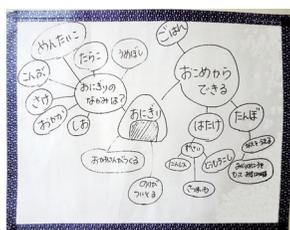


写真14 「おにぎり」web



写真15 田植え活動



写真16 草を発見する

(2) 年中（にじ組）—イノシシ/北海道プロジェクト—

朝の会では担任がウクレレを弾き、みんなで歌っている。その後、三人の子どもが楽器を（トライアングル、カホン、木魚のような打楽器）奏でる。

北海道から新しい友達が来ることから子どもたちは、「北海道には—牧場がある—牛がいる—イノシシがいる」と、イノシシに興味を示して、プロジェクト活動が始まった。イノシシ探しの牧場散歩やイノシシの製作（写真21）、劇としての表現、イノシシ牧場の見学を希望して電話・FAXを送ってみるなど、にじ組のイノシシ/北海道プロジェクトは、継続している（赤碓こども園ホームページより：質の高い保育をめざして、注目のプロジェクト、イノシシ/北海道プロジェクト 2017年8月10日）。

ウェブ×KJ法についての話し合い—ホームページ（園内研修）から紹介—

園内研修では、プロジェクトの進め方をみんなで再確認しようと、「かえる」（写真20）と「イノシシ」をトピックに、3グループに分かれてウェブを書いてみました。トピックの「かえる」（写真17）では、項目を付箋に書いてから、それを紙に貼り付けるという方法で、ウェブを書いていきました。

トピックの「イノシシ」（写真18）では、付箋が足りなくなったこともあって、付箋を使わずに線を伸ばしていく方法でウェブを作りました。ウェブを使つての発表や、書き上げられたウェブから「感じられた」利点は、付箋を使わない方が、①項目間の繋がり方に滑らかさを感じる（飛躍がない）、②イメージを連鎖させていく、引き出していくという点で、子どもと一緒に作る時にはウェブの方が良い、などの利点です。

付箋を使った場合の利点（写真19）は、①全員が意見や考えを平等に出せる、②項目間の飛躍がある反面、アイデアが広がるなどです。その代わりに、付箋を分類分けして線で結んでいく作業は、線で描いていくよりも時間がかかります。また、誰かが中心になって進めていく必要があります。

グループの中には、最初に付箋を使ってアイデアを出し合い、それをもとにウェブを書くというように、2つの方法を組み合わせたグループもありました。このグループのように、メンバーの異質性が高い場合には、まず、付箋を使ってみんなの声を出し合い、その後、その付箋を紙に貼るのではなく、付箋を参考にして、ウェブを書いていくという方

法が良さそうです (赤碕こども園ホームページより：質の高い保育をめざして、保育環境の変化・展開ウェブ×KJ法 2017年5月16日)。



写真17

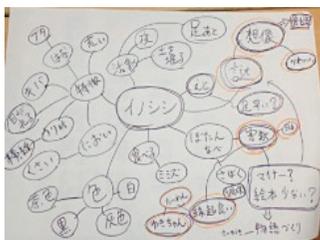


写真18



写真19



写真20 飼育中のカエル



写真21 段ボールのイノシシ

プロジェクトを充実させるためにwebの使い方—ホームページ(園内研修)から紹介—
研修後の振り返りから、プロジェクトを充実させるために、次のようにまとめられている。「Web作成のポイント」はみんなが対等で、違いと繋がりながら楽しむ、としている。「一人で考えていくと、狭い見方に落ちこんでいく。判断せず、いろいろな意見を出し合うことで、今まで自分にはなかった世界が広がっていく感じがした。誰かの意見に呼応して、そこから特別の人の考えが繋がって伸びていく。その繰り返しで、あっという間に『私』の常識が破られていくのがワクワクして面白かった。子ども同士の話し合いでも、そのような開けた対話ができればいいと感じた」(赤碕こども園ホームページより：質の高い保育をめざして、園内研修振り返りシート 2017年5月18日)。

(3) 年少(つき組)—散歩・集乳車/牛プロジェクト—

散歩でお化けの家、牛、集乳車などを見て、子どもたちは牛プロジェクト、集乳車プロジェクトを始めた。玄関のオープンスペースで段ボールをカットして、保育者と製作(牛の家)している子もいる(写真22)。先月、製作した時は、「牛の家」よりも自分たちが中に入って遊べるスペースという意識が優位になり、その日に製作したものは壊れてしまった。「もう一度作ればいい」という子どもの言葉から、次につなげて行くことになった(つき組活動の記録 2017年7月7日)。

散歩から様々な学び(自然・生活・社会)があることをまとめている(写真24)。クラス前の廊下ではポートフォリオを子どもが手に取っている(写真23)。



写真22 牛の家を製作中



写真23 ポートフォリオ

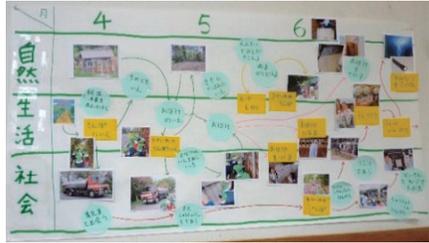


写真24 自然・生活・社会

保育環境の変化・展開、さまざまな web—ホームページ（園内研修）から紹介—

それまでは保護者に読んで貰うために、大人の目の高さのところに置いていた「活動記録」を、子どもたちとも情報を共有したいということで、子どもたちの目の高さのところに置き直しました（写真25）。

つきぐみでは、『一本道』の絵本を読み、その後、出かけた散歩で出会った「集乳車」（写真26）と「おばけ屋敷」（写真27）が子どもたちの興味・関心の的になっています。ウェブというと、文字で書くことというイメージがありますが、このウェブでは写真を中心に置き、絵やイラストなども使っています。また、子どもたちから、おばけや集乳車の話題が出た時に、随時、内容を増やしていっています。中心に写真を置いているので、中心を固定的に考えてしまいがちですが、そうならないようにしましょう。子どもたちの興味関心はどちらのどの方向に延びていくのかは予測できません（赤碕こども園ホームページより：質の高い保育をめざして、保育環境の変化・展開 2017年5月15日）。



写真25 活動記録

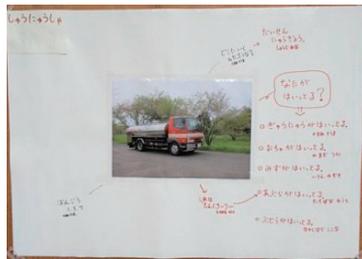


写真26 集乳車



写真27 おばけ屋敷

(4) 2歳児（はな組1・2）—運動会、七夕—

「運動会 何する？」と題した紙が、貼ってある。2歳児の運動会へのイメージを広げるために、また、会話を分かり易くするために、キーになる言葉を絵で表している（写真28）。「7月は七夕の夜空を演出するため天井を黒いシフォンで覆っていたが青色のシフォンに変えた。子どもたちに何に見えるか聞くと「海」という答えが返ってきた。海には何がいると聞くと魚、かに、自分も泳いでいる、などという答えが返ってきた。保育者が

をジックリと考える、⑫素材との関わり方は、年齢ごとに変化していく、⑬素材を集めた時に分類・整理してみる、⑭色々なものが雑然になっていること（顕微鏡やPC、テレビなど、家にはないものもあるもの、普段触れるもの、お目にかかわれないものなど）、⑮質の良い生活の実現「どのような生活がいいかな～」と子どもと一緒に考える、である。

そのうえで「子ども観を問い直す」として、まず、子どもは「感性に勝り、知性において同等」である。「大人よりも劣っているのは、経験だけ」と述べている。さらに、子どもについて3点にまとめている。①子どものしていることには必ず意味がある：何気なくしている子どもの行動、遊びに注目する。そこにはたくさんの学びがある、②「対話」を阻害せず、一緒に素材と関わっていくことが、学びとして子どもにも私たちにも恩恵を与えてくれる、③子どもたちは身近にある物を何でも素材にしてそれを作品にしてしまう。ゴミとってしまう物でもそこに遊びや学びを見つけて、自分だけの作品を創り上げる。大人にはなかなか思いつかない発想を持つ。いろんな可能性を秘めているのが子ども、である（赤碕こども園ホームページより：質の高い保育をめざして、園内研修、振り返りシート2017年2月）。

(6) 乳児クラスのプロジェクト活動—生き物をとらえる—

1歳児クラスでは様々な生き物にふれあった事を Web で表している。透明のシートを使い重ねていくのは、保育者のアイデアである。カタツムリ（写真33）、カメ（写真34）、イヌ（写真35）、子ども（写真36）をとらえている。保護者へは保護者向け掲示板があり、ポートフォリオ（写真38）で毎日の活動を知らせている。

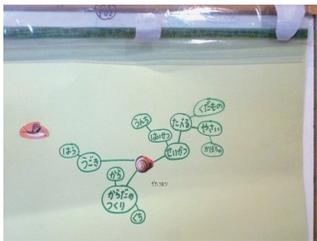


写真33 カタツムリ web

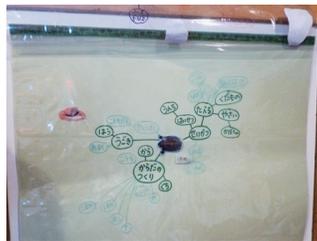


写真34 カメ web

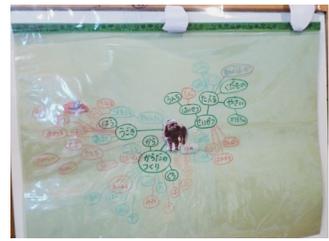


写真35 イヌ web

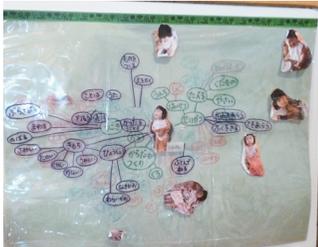


写真36 子ども web

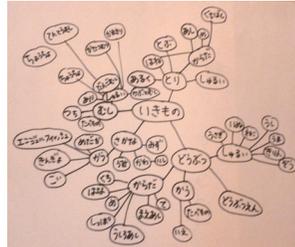


写真37 いきもの web



写真38 ポートフォリオ

プロジェクトを計画するにあたって—ホームページ（園内研修、振り返りシート）から紹介—

プロジェクト活動を始めるにあたって、重視する点を下記のようにまとめている。

まずは、「子どもが出発点」とすること。①子どもの姿、遊びの様子を見たり、一緒に遊ぶことを大切にして、そこから実践を進める。②子どもの興味関心から始まり、保育者がそれをどう見て、どう読み取っていくのかによって、活動が深まり、広がっていく。③それを子ども同士、保育者同士、子どもや保育者、あるいは周りの大人との関係性を深めて行くことで、さらに展開していく、のである（赤碕こども園ホームページより：質の高い保育をめざして、園内研修、振り返りシート 2016年10月）。

「仮説の大切さ」に注目すること。具体的には、①子どもたちの「仮説」がプロジェクトを広げる重要なキーワードである。②何を軸にしてプロジェクトを進めるか、迷った時には、もう一度 Web をふり返し、「仮説」を再度確認してみると、次の一歩が見えてくる、と述べている（赤碕こども園ホームページより：質の高い保育をめざして、園内研修、振り返りシート 2016年9月）。

(7) 0歳児（おひさま）—ポートフォリオ・毎日の記録—

ポートフォリオのコーナー（写真39）には毎日の活動が示されている。0歳児は24時間の生活を園と保護者が共有するために、ノートのやり取りをしている。遊びのコーナーでは多文化共生の保育をめざし、ペルソナ人形（写真40）も取り入れている。



写真39 ポートフォリオコーナー



写真40 ペルソナ人形



写真41 おやつ時間

0歳児のプロジェクト活動—ホームページ（園内研修）から紹介—

園内の研修で0歳児のプロジェクト活動を振り返り、重視する点を下記のようにまとめている。

①0歳児のプロジェクトと聞くとすごく難しそうでしたが、五感で感じ取ったことが、(子どもの)表情の豊かさや様々な運動に繋がっていくことを改めて感じたので、そこに寄り添っていくことが大切なのだと思います。理事長先生や他の先生方のお話を聞いて、保育者の関わり方や知識の深さが保育に与える影響の大きさを改めて感じた。②0歳児のプロジェクトを考える機会は今まで無かったが、他の子どもと0歳児は共通していることがあると思った。例えば、「朝顔を取りたい、触りたい」と思えば、ハイハイや歩いたりして

朝顔に近づいていくだろうし、匂いを嗅いで、変な匂いがすれば顔をしかめるだろう。自分が「何だろう」「興味がある」ものと思う時、「自分から働きかけること」は同じだと思った。保育者として、その時々の子どもの表情やつぶやきは拾っていきたい、いかなければならないと思った。さらに、子どもの世界を広げるような活動や遊び、言葉かけが大切だと改めて感じた。

おひさまぐみのプロジェクトでは、子どもが感じることと大人の働きかけが響き合うことで学びにつながるのではないか。子どもたちの感性に日々寄り添い、言葉かけできるよう、心がけていきたい、と結ばれている（赤碕こども園ホームページより：質の高い保育をめざして、園内研修振り返りシート、おひさまぐみのプロジェクト 2016年9月30日）。

考察

赤碕こども園では、各クラスでプロジェクト活動が展開されている。それは職員の間で保育・保育実践への共有と学びが原点であると考え。「プロジェクトは生活の中から生まれる。子どもたち一人ひとりが今、何に興味・関心を持っているのかをしっかりと把握することが大切⁶⁾」である。そうしたことが共通の認識として持てる職員集団である。

つぎに、「赤碕こども園、みんなで創る園内研修」に注目したい。2018年園内研修の目標を見ると以下の3点が示されている。

- ①赤碕保育園時代の保育（プロジェクト保育）の質を維持し、高める。
- ②保育者一人ひとりが園全体ならびに個人の保育を自分の言葉で語れるようになる。
- ③非常勤の保育者が赤碕こども園の教育・保育理念や教育・保育方法を理解する。

上記の3点を進めるために、園の実践を行っているが、この内容を考察すると以下の5点にまとめることができる。

第一に、「webの作成・使い方」「素材との対話」「ポートフォリオの展示」などクラスの実践を持ち寄り、職員全体で検討している。イノシシ/カエルプロジェクト（年中組）や散歩・集乳車/牛プロジェクト（年少組）などのwebをもとに、webの作成・使い方を学んでいる。段ボールとの関わり（1歳児）は、園内研修「素材の学び」が生かされていると思われる。各クラスのポートフォリオの展示の仕方も紹介・検討されている。プロジェクト保育を理解し、進め方の基本を学ぶことによって保育者一人ひとりが保育を語れるようになる。保育者のこうした学びがあることにより、プロジェクト保育の活動を充実させ、生活を豊かにする保育の実践が進んでいると考える。

第二に、園内研修の実施後は保育者の声を反映させ、「振り返り」として園長がまとめを行っている。園内研修の時間を設定することも厳しい保育の現場で、研修を実施した後、研修の内容を振り返り、新たな方向性を生み出している。保育者自身の振り返りもあり、「話し合うことで、活動が広がっていくことを改めて感じ、プロジェクト活動をしながら、他の先生にアドバイスをもらっていくことが大事だと思った」「一つのトピックに

ついて、先生たちで話し合うことで自分にはない視点に気付いたり、自分も話しながら気付
きがあり、対話の重要性、面白さを改めて感じた⁷⁾と全職員に伝えられていく。こうし
て、「振り返り」は共通の認識を作り上げ、次のプロジェクト保育に確実に生かされてい
く。

第三に、赤碕こども園の各クラスの「研修振り返り」の記述を見ると、「臨時正職関係
なく、子どもに向ける視線を同じにして、今トピック探しをしています」「みんなで学ぶ
ことは楽しいですね」、園長先生の振り返りから、「さまざまな『対話』、それを赤碕こ
ども園の文化にしていきたいと思います！」⁸⁾と結ばれている。これは正規・非常勤の保育者が園
内研修の中で学び合い、理解を深め合っていることが伺える。近年どこの園でも非常勤の
保育者が存在する。園の教育・保育理念や教育・保育方法を十分理解する機会がないま
ま、保育に携わる非常勤の保育者も少なくはない。赤碕こども園では非常勤の保育者も共
にプロジェクト保育を進めることを目標として掲げ、園内研修を行い、保育の質をさらに
高めている。

第四に、赤碕こども園では、保育課程の中で、①表現者を育む保育（子どもが言葉だけ
でなく様々な表現で気持ちを表す保育。保育者は、子ども一人一人の心の揺れ動きに気付
き、寄り添い、見守りながら遊びを共有できるようにする）とあり、子どもが権利の主体
であることを示している。また、②文脈のある保育（切り取られた知識の吸収ではなく、
文脈のある流れの中で学ぶ保育を展開する）と真の学びを追求することが示されている。

改定幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育要領・保育要領で
は、「育みたい資質・能力」と「幼児期の終わりまでに育って欲しい姿」が新たに示され
ている。これらの内容は、赤碕こども園のプロジェクト保育のように、子どもの成長・発
達の喜びを共有できる職員間、父母・保護者との信頼関係があってこそで、子どもたちに
協同性、思考力の芽生えが育まれ、表現する喜びを味わい、生活・学びへの意欲に繋がっ
ていくのではないかと筆者は考える。

第五に、年度初めの園内研修では、『赤碕こども園ガイドブック』⁹⁾を読み合い保育理念、
子ども観、教育、保育課程、保育方法、を職員で再確認している。子ども観およびそれを
支える保育の原理として、ヴィゴツキーやエリクソンを学び、保育計画と実践の中には、
プロジェクト保育の活動を充実し、生活を豊かにする（子どもの主体的な取組みに注目
し、体験を経験化する。個々の子ども、あるいは集団の興味・関心に沿った協同による保
育)¹⁰⁾、などが示されている。職員一人一人が意欲的に学び、自由に語り合える雰囲気
の中でこそ、子どもを可能性に満ちた創造性あふれる存在として尊重することができる
と言える。職員の主体性や意欲が育つ環境の園であることが、保育の質の向上を目指す
うえで大切なことではないかと考えた。これはレッジョ・エミリア・アプローチの取り
組みをする園とも共通することである。

赤碕こども園にはアトリエリスタはいないが、保育者がアトリエリスタの役割を担い、

ペダゴジスタは理事長先生であり、園長先生であると筆者は考えた。さらに、赤碕こども園でプロジェクト保育の実践を進めるにあたって両氏の指導力の大きさはもとより、子どもを真ん中に置いた全職員と父母・保護者の協同性の大きさを実感した。

レジジョ・エミリアの保育・教育で中心をなすのは子どもであり、保育者を含む全職員であり、父母・保護者である。赤碕こども園の保育課程にも、保育計画と実践に、(家庭をはじめとする地域資源と連携する)¹¹⁾とある。機会があれば、父母・保護者や地域との連携について、赤碕こども園ではどのような実践が積み重ねられてきたのか検証したい。また、今後とも、赤碕こども園のプロジェクト活動に注目していきたい。

最後に、お忙しい中、園内を案内し、長い時間の説明、質問への応答をして下さった園長先生、保育を快く見学させて下さった保育者のみなさん、赤碕こども園の園児のみなさんに心より感謝を申し上げたい。

本稿の、写真を含む本文の内容は、名古屋芸術大学倫理規定に基づいて、赤碕こども園園長片桐隆嗣氏の了解を得たものである。

引用文献

- 1) 木下龍太郎「子どもの声と権利に根ざす保育実践——レジジョ・エミリア・アプローチの意義と特徴」『現代と保育』50号、ひとなる書房、2000年4月、106-194頁。
- 2) 木下龍太郎「子どもの声と権利に根ざす保育実践——レジジョ実践を支える組織と人間」『現代と保育』52号、ひとなる書房、2000年12月、158-179頁。
- 3) 中坪史典「レジジョ・エミリア・アプローチにおけるプロジェクト活動の理論と実践」『国際幼児教育研究』第8号、2001年、37-44頁。
- 4) 山本理恵、原明子「力強い『子どものイメージ』レジジョ・エミリア・アプローチの原理」(翻訳と解説)『人間発達学研究』第7号、2016年、123-135頁。
- 5) C. エドワード他編著、佐藤学他訳『子どもたちの100の言葉』2001年、5頁。
- 6) 社会福祉法人赤碕保育園「赤碕こども園要覧」、ホームページ <http://akasaki-kodomoen.jp/> 2017年8月10日。
- 7) 同上 2017年9月15日。
- 8) 同上 (同上)。
- 9) 同上 2017年10月1日。
- 10) 同上 (同上)。
- 11) 同上 (同上)。

参考文献

- J. ヘンドリック『レジジョ・エミリア保育実践入門』北大路書房、2006年。
 佐藤学『驚くべき学びの世界』東京カレンダー株式会社、2011年。
 レジジョ・チルドレン『子どもたちの100の言葉』ワタリウム美術館、2012年。

- 森真理『レッジヨ・エミリアからのおくりもの』フレーベル館、2013年。
- 磯部錦司、福田泰雅『保育のなかのアート』小学館、2013年。
- 勅使千鶴他編著『「知的な育ち」を形成する保育実践ⅠⅡ』新読書社、2013年。
- 森真理『ポートフォリオ入門』小学館、2016年。
- 泉千勢他編著『なぜ世界の幼児教育を学ぶのか』ミネルヴァ書房、2017年。
- 穴戸健夫『日本における保育カリキュラム』新読書社、2017年。